

## 中部哲学会 2019 年大会シンポジウム 「集合知と哲学の未来」

オーガナイザー：吉田寛（静岡大学）

提題者：石川竜一郎（早稲田大学）

谷口 忠大（立命館大学）

戸田山和久（名古屋大学）

田中 伸司（静岡大学）

司 会： 鈴木 真（名古屋大学）

### 開催趣旨

近年、Wikipedia や各種まとめサイト、Google 等の web 検索、twitter などの SNS といった情報サービス活用の機会が急速に拡大しました。情報技術を活用したこうした集合知的な情報利用は、人類の知性にとってどのような変革をもたらすのでしょうか。また、古来より読書や対話、熟考などによってささえられてきた哲学的知性は、情報化のもたらす新しいタイプの地の潮流をどう評価し、受け止めていくべきなのでしょう。「集合知」をキーワードに、情報化がもたらす知の変革の中で哲学的知性の未来を問います。（吉田寛）

### 提題 1：石川竜一郎「コミュニケーションの場の動的ゲーム論理」

本講演では、ルール化された対話空間におけるコミュニケーションを分析するためのゲーム理論的モデルを提示する。本モデルは(1)熟議の第一ステージおよび(2)決議の第二ステージで構成される。第一ステージでは、主体は共通のテーマを異なる立場から議論を行う。第二ステージでは、第一ステージでの議

論を踏まえて、投票などの社会選択ルールを通じて意見を集約し、その対話空間の社会的意思決定を行う。本モデルの特徴として、ゲーム理論を認識論理で分析するゲーム論理の手法を用いているため、各主体の認識構造が明確になる。さらにこの枠組みを、第二ステージでメカニズムデザイン理論と接合する。これにより合意形成のためのコミュニケーションを、主体の認識とコミュニケーションルールの観点から分析する。結果として、発話行為の合理性に基づいた、対話空間のルールが主体に与える影響の分析が可能になる。

## 提題 2：谷口忠大「コミュニケーション場のメカニズムデザインによる分散した「知」の活用に向けて」

本講演では多人数のコミュニケーションを間接的に制御するコミュニケーション場のメカニズムデザインの概念について紹介する。複数の人間が参画し話し合い、会議、相談等をしている状況は、自律的分散的なマルチエージェントシステムとして捉えられる。各主体はあくまで自らの効用に基づいて行動するために、その振る舞いを誘導するためには適切な誘引や制約の設計が重要であ



【写真】 谷口忠大先生による提題の様子。

る。ビブリオバトルや発話権取引などの事例に触れながら概説する。また、JST 未来社会創造事業「[知]の循環と拡張を加速する.対話空間のメカニズムデザイン」(代表:谷口忠大(立命館大学))プロジェクトに関しても触れる。

**提題 3: 戸田山和久「集合知じゃない知識ってそもそもあるのか、だとしたら知識を私の頭に入れておくことにどういう意味があるのか(私にとって)」**

タイトルのようなことが気になるので考えてみたいと思います。もちろん、私固有の知識というのはあって、人に知られたくないヤバイ本とか DVD を自宅のどこに隠してあるのか、というのは私しか知らない(これが集合知だったらすごくいやだ)。そしてそれは私の頭の中にある。そして、それは役に立つ。でも、より知るに値すると思われる知識は、そもそもたいてい集合知だと思うのね。科学的知識はその典型でしょう。社会的な意思決定に資する知識群もそう。マイニングしてがっばがっば儲かる系の知識もそうかもしれない。そうすると、重要なのは、それをことさら「集合知」と呼ぶことにどんな意味があるかということと、にもかかわらず知識を私の頭の中に入れておくことにどんな意味があるのか(このグーグルの時代にです)、ということです。これに答えてみたいと思います。

**提題 4: 田中伸司「専門家のいない領域で哲学者は何をするのか？」**

集合知は「[正しい]か[誤っている]か判断する基準がない」(スロウィツキー『群衆の智慧』323)領域において、「時間をかけて」(同 325)意思決定(=熟議)されるのであれば、「全体としてはプラトンの守護者が考えつくどんなソリューションよりも優れて」(同 326)おり、「民主的に群衆の意見を聞くという判断に群衆の智慧が現れている」(同 326-7)と主張される。確かに、古代ギリシャ哲学、とりわけプラトンは集合知(群衆の智慧)という知見に対して一

見否定的である（『クリトン』44c-d 等）。他方で、正義や節制に係る事柄については専門家の不在が示唆され、市民は誰であれそれらの事柄について発言できるという思想に肯定的であるようにも見える（プラトン『プロタゴラス』319b-328d）。本提題では、このようなプラトンの立場を概観したうえで、アリストテレスの「人びとに思われているところ（タ・パイノメナ）を提示」（『ニコマコス倫理学』1245b3）する「定評のある見解（エンドクサ）」による探求方法を参照し、プラトンやアリストテレスの議論のうちに正解のない合意形成あるいは「熟議」を可能とする議論 — そこがおそらく非専門家としての哲学者の仕事場 — があることを確認する。



【写真】 シンポジウムでの提題者の先生方の様子。

左から鈴木真先生（司会）、石川竜一郎先生、谷口忠大先生、戸田山和久先生、田中伸司先生

※ これは予稿集からの転載に当日の写真を掲載したものととなります。（写真の無断転載禁止）